

大人のぜんそく

薬で気道をよい状態に保ち、
発作が起きないようにコントロールしていく

「ぜんそく」は、子どもに限った病気ではなく、大人になってから発症する方も大勢います。せきや痰などの症状が風邪に似ており、ぜんそくとは気付かない場合もあるので注意が必要です。

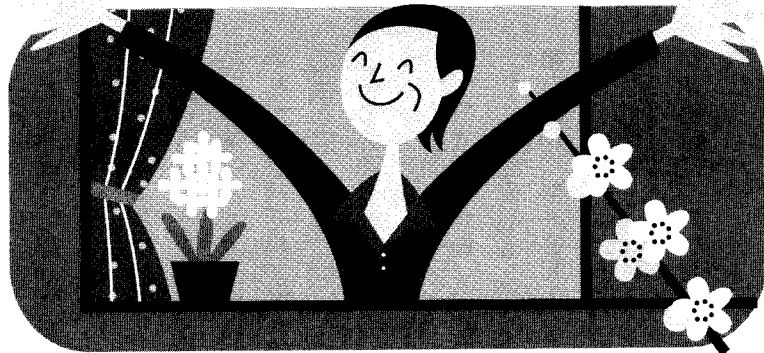
ぜんそくの治療はここ20年間に大きく進歩し、発作でつらい思いをしなくても済むようになってきています。そのためは、発作の出ていないときでもきちんと薬を使い、気道をよい状態に保つことがポイントです。

取材・文／松本雅子 イラスト／小沢和夫



山口内科院長
山口 泰(やまぐち やすし)

1959年生まれ。順天堂大学医学部卒業後、米国留学などを経て、鎌倉市大船で開業。内科系家庭医として患者さんの心身の一つのものとしてとらえる幅広い全人的診療を行っている。著書『わかって治す!家庭の内科学』(ごま書房)がある。<http://www.yamaguchi-naika.com>



慢性的な炎症により、
気道の粘膜が過敏になって発作が起る

日本における成人の「ぜんそく」有病率は、1960年代には人口の約1%弱でした。しかし、現在は約3%程度にまで増加し、成人と小児を合計すると約400万〜450万人の患者さんがいると推計されています。

ぜんそくは、気道が急に狭まる「ぜんそく発作」が繰り返して起る病気です。

以前は亡くなる人も多く見られましたが、治療の進歩によってぜんそくによる死亡者数は1995年以降この数十年で半減しています。

ぜんそく発作が起る根底には、気道(空気の通り道)の慢性的な炎症があり、粘膜が過敏

になっています。そこに何らかの刺激が加わると、気管支を取り巻く筋肉が収縮し、気道の内腔が極端に狭まって発作が起ります。

●ぜんそく発作の主な症状は

ぜんそく発作が起ると、「息が苦しくなり」、ひどくなると呼吸ができなくなります。呼吸をするときに狭い気道を空気が通るため、「ゼーゼー、ヒューヒュー」という特有の音(喘鳴)を伴います。せき・痰もぜんそく発作の主な症状です。発作が軽い場合には、せきや痰があっても、それほど息苦しくないので、風邪と間違われることもあります。

炎症の原因と、
発作が起りやすい時間や季節など

発作が治まると息苦しきなどの症状は一時的に消えますが、気道の慢性的な炎症が続いてい

ることを忘れてはなりません。発作を繰り返すたびに慢性的な炎症は悪化して、気道の粘膜は